

# 大地

第 62 号  
2021. 1. 23. 発行  
浄 國 寺  
上越市寺町3丁目14-10  
☎025-523-5724

## 【俳句】

山崎 睦

木犀うせいの薫り継ぎゆく家中道やなかみち

仏壇ぶつだんの灯ひをゆらしけり隙間風すままかぜ

鏡餅かみもち寒九かんくの水に沈めけり

年新たなれどこの身このままで

薄闇うすやみに下校チャイムや日短ひたじか

初鏡老はつかがみわらひの顔にも夢すこし

句集『朝の光』より

平成八〇九年

## のちの心にくらぶれば

山崎隆史

逢ひ見てののちの心にくらぶれば 昔はもの  
を思はざりけり 権中納言敦忠

※ 題名は艶っぽい短歌から採りましたが、  
内容は全く違うのでご安心ください。

新型コロナウイルスの流行を受けて、「新しい生活  
様式」なんて事が言われています。実際、新  
型コロナ流行の「前」と「後」とでは、色々  
と変わったものが多いと思います。行動も気  
分も、何もかもが影響を受けています。

何か大きな出来事が起き、その後に何もか  
もが変わってしまう、という事があります。  
東日本大震災を始めとする大災害、9・1  
1アメリカ同時多発テロ事件、リーマンショ  
ックやバブル崩壊のような経済的な面での  
事件など。直接的な被害が無くても、もの  
考え方や周囲の環境に影響を受けずにはい  
られないでしょう。

私たちは経験していませんが、一定以上の  
年代の方なら、終戦（または玉音放送）を最  
も大きな事件に挙げるかも知れません。

もちろん、個人的な様々な出来事、ケガや  
病気や事故だとか、親しい人を亡くしたとか、  
結婚したとか、宝くじにあたったとか、そう

いう事によっても大きく変わると思います。  
特別な出来事が無くても、技術の発展や社  
会情勢の変化が、個人の行動や考え方に影響  
を及ぼしている事もあります。

交通網が発達して、遠くへの移動がどんど  
ん楽になっていきます。カーナビのおかげで、  
ドライブの前に地図で下調べする必要はほ  
んど無くまりました。コンビニがあちこち  
にできて、夜中でもちよつとした用事を済ま  
せる事ができます。

一番目立つのは携帯電話でしょう。携帯電  
話が普及して、いつでもどこでも連絡の付く  
のが当たり前になっています。電話帳も内蔵  
しているので、自分で電話番号を覚えなくな  
りました。カメラが付き、メールのやりとり  
ができるようになり、さらにSNSというも  
のが出てきて、いまや写真や情報を誰かと共  
有するのが当たり前です。時には、SNSに  
画像や動画を投稿するために食事したり旅  
行したりしているのではないかと、疑いたく  
なるような人もいます。携帯電話がスマート  
ホンになって、一層便利に何でもできるよう  
になっています。

新型コロナウイルスも、いずれはワクチンや特效薬  
が出回り、インフルエンザ並の扱いになるの  
でしょうか。そうすると、感染拡大の時と同  
じく、収束によってもまた何かが変わるので  
しょうか。

# おとうさんへ

川崎 香子

(Kyoko Kawasaki Shannon)

おとうさん

もう一年経つんだね。もう本当にいないんだね。不思議。おかあさんとテレビ電話で話していても、隣の部屋からおとうさんがひょいと顔を出してきそうな、まだそんな気がすることもあるんだよ。おかしいね。

おとうさんがいないことを少しづつ受け入れてきて、喪失感からも少しづつ、ほんとに少しずつ回復しつつあったけれど、この八月四日が近づくとつれ、やっぱり去年の辛い思い出がよみがえってきて、息が苦しくなるよ。こうやって文字にしようと思っても、いろんなことを考えて手が止まってしまう。

去年の今ごろは、おととしの今ごろは、なんて考え始めたたら、もうダメだね。五年前、十年前、二十年前……頭の中を思い出が駆け巡って、それと一緒にいろんな感情が押し寄せて来て、もうどうしようもなく涙が流れて止まらなくなる。

おとうさんの存在、こんなに大きいんだよ。知ってた？

今まで一周忌の意味なんて考えたこともなかったけれど、もしかしたら、これは辛い時間を乗り越えた後に家族が顔を合わせて、辛かったね、頑張ったねって励まし合ったり、元気でいることを確認し合ったり、思い出話なんかをしながら泣いたり笑ったり、そんなことをしながら生きている私たちの心を癒すためのものなのかな、なんて思ったりもしたよ。

そんなせっかくの機会なのにこの一周忌を日本で迎えることができないのがとても残念です。あなたの大好きな美喜子さんのそばにいてあげることができず、それも本当に申し訳なく思います。

おとうさんのいないこの一年の間に、世界は大きく変わったんだよ。当たり前だと思っていたことがそうでなくなっていて、ありきたりな平凡な毎日を送れることがどれだけ幸せなのか、改めて深く考えさせられているよ。

おとうさんはこうなるって知ってたのかな。だから急いで逝っちゃったのかな。

もっと聞きたいことも話したいこともたくさんあったのに。ああすれば良かった、こうすれば良かった、考え始めたらきりが無い。人ってさ、本当に失ってから気付くんだね、大事なこと。

おとうさん、おかあさんのことも心配してるのかな。そうだよ、大好きだったもんね。でも大丈夫、私も麻子も一生懸命できる限り支えようとしているから。どうぞ娘たちのことを信用して、安心してください。

おとうさん いろいろありがとう。

どうか思いが届きますように

香子

※川崎香子さんは、現在夫君の母国カナダに在住。妹の麻子さん共々、幼い頃から父親である川崎宏さんを尊敬し、心から慕って成長を遂げました。

そのお父上は二〇一九年に体調を崩され、同年八月にお浄土に還られました。看病から見送りまで、家族一丸となって心を込めてなす遂げられました。

お父さんへの真情あふれる手紙は実に素直で、多くの人々の共感を呼ぶことでしょう。早くに原稿を頂きながら発行が遅れましたことをお詫び致します (慎子記)

## 「もう」とか「まだ」とか

山崎 直子

二年続いた暖かい冬から一転、雪国ということを思い知らされる年の初めとなりました。全国ニュースで取り上げられるご近所の映像を見ながら、去年や一昨年を取り戻そうとするかのような雪雲の厚さや勢いにもただただ驚くばかりでしたが、短期間で降った量としては市内の降雪記録も更新されたそうで、除雪の作業が追いつかない、という声が周り中から聞こえた先日の連休でした。

忘新年会のシーズンながら街も静かで、去年から続いている、火に会う、出かけ、集まる、気の合う仲間と食事をする、ということ制限される生活の上にもまた降りかかってきたこの大雪に、二〇二一年の始まりからして右往左往のスタートとなりました。

それでも、雪に閉じ込められるのもそろそろ限界……。買い出しくらいには出なくてほと、大げさでなく「意を決して！」

雁木通りにおかあさんと出てみると、あちらこちらの雪の塊に足が埋まり横に滑り、歩きなれた道にも悪戦苦闘。除雪が間に合わないのも当然の積雪量にはもう傘すら邪魔になります。いつもの倍ほどの時間をかけ、それでもふと前方を見ると、積雪で狭くなる店舗の前で足を止めて道を譲って下さる方がおられました。

「ありがとうございます！」

と、二人で声をおかけすると笑顔で返して下さいましたが、雪国らしい譲り合いに、ホッとさせて貰えた久しぶりの外出に、雁木そのものが〈相互扶助〉の証、と聞いた生活の知恵と温かみを感じる出来事となりました。風雪厳しい土地だからこそ、ささやかなやりとりにもひと息つかせてもらえるのかもしれないね。

次々と目の前に現れる問題に振り回される毎日、果たして今年を振り返る頃には「もう一年」だと思えるのか「まだ一年」だと思えるのか。ウイルスの狂騒を少し遠くにした〈雪の高田〉はいましばらく続くのかもしれないが、寒さに首をすく

める中であっても、他者と関わる喜びや向けられる思いやりに温められる、久しぶりの豪雪の日々です。

※雪の中のお年始、ご心配のお電話、本当にありがとうございます。来年はいつものようにお迎えできるようと願っております……。

## 土と共に生活する

コロナ感染がこれまで深刻な状況になるとは誰も予想しませんでした。

コロナウイルス（変化はしますが）は元々地球に存在していたものです。

土と共に生活してきた人間は、産業革命以降の近年、文化（豊かな暮らし）の創造のため自然を壊し（改造）し始めました。地球の温暖化と同様に、コロナ禍も人間が扱めたと言えなくもありません。

現在の便利な生活にどっぷり浸かっている私を含め、私たちにとって本当にかけがえのない大切なものは何かをコロナ禍に問われているのでしょうか。ある篤農家に「土はね、沢山の命の塊なんですよ」と教えられたことを思い出します。

（隆昌記）

# ワン公物語

華のつぶやき 22

山崎 華 (慎子代筆)



私は華。これをつぶやいた頃は十三才三カ月位。皆の原稿が間に合わなかったり、その他の事情で、もう十三才七カ月程になる。

ところで十三才の誕生日を迎えた頃から、どうも調子がおかしくなり始めた。時々、息が苦しくなる。元々私達、バグは鼻がつぶれているので息が不自由という特徴があるにはあるのだけれど、今度のコレはちと違うのではないかと、次第に不安な気分になっていく。

でも私がハアハアしていても、母さん達には気付いて貰えない。「バグだものね」と軽く流されてしまうのだ。ウーン、口惜しい。前後して膀胱にも変調をきたしたらしく、排尿のコントロールがままならなくなってしまったのだ。アレツと思う間に漏らして慌てたり、外に連れ出して貰っても、なかなか出てくれなかったり、私としても困ったことになったと思っただけけれど、父さん達も初めの内は年のせいかな、なんて考えてたみたい。確かにそれもあるに違いないのだが、ある日母さんが私のオシッコに微かにピンクが混じっているのを発見！

獣医さんによる膀胱炎の診断 (二度目です)

が)おまけにレントゲンで心臓肥大も見つかったという次第なのだ。

蓮姉ちゃんとは違って、私は小さい時からほぼ病氣知らずで来たのだ。蓮姉ちゃんは病弱で、よく獣医さんに行っていたし、フードもペーハー調整とかいう、市販されていないお高いのを食べていた。

その点私は、犬用のフードであれば好き嫌いなく食べるので、好みの面倒なダックスを飼っているスギタさんはいつも「華ちゃんは、何でも食べてお利口ネエ」と誉めそやしてくれるのだ。

それが今では、ドライアイに膀胱炎に心臓肥大。それと最大の難問は、私が夜中にふと目覚めた時に寂しさに襲われて母さん達を呼んでしまい、これが母さんを大いに悩ませてしまった。獣医さんによれば、こうした症状は「分離不安」と言うんだって。

母さんの眠ることへの拘りはかなり強い。もう執着と言ってもいい位に。睦おばあちゃん、の最晩年も介護から不眠に悩まされ、少々ノイローゼみたいになったこともあり、眠れないことが、とても怖いらしいのだ。

私はそんなことを思いやる余裕もなく(なにしろワン公ですから)苦しくなれば苦しいと叫び、寂しくなれば寂しいと吠えるので、隣の部屋が寝室である母さんは、すっかり参ってしまったのだ。

父さんは、そんな母さんを見るに見かねてある晩二人で相談した結果、母さん一人が寝室を一時引越すことにしたのである。

以来、夜半から朝早い私の面倒は、父さんが一手に引き受ける事になった。私はワン公なりに、父さん、ゴメンナサイと思わないでもないのだけれど、何しろ苦しいのだ。

暑くて長い夏が終わり、コロナウイルスと共に秋を迎え、私の状態は確実に衰えて獣医さんとの距離が一気に縮んでしまった。

何だか、肺も気管支も悪いんだそうで、排せつと三度の食事、時折、父さん、母さん、直子姉さんの膝の上でくつろぐ以外は、寝てばかりの暮らしになってしまった。

華やいかに！

父さんはじめ家族みんなが私の心配をしてくれているのは、私にもよく分かる。

でも、これが年老いて、やがて命を終えて行く過程なのかと、すっかり疲れてしまった体と心で考える。

しょうがないなあ。マ・イイカ！

実はね、このつぶやきの陰で、結構ドラマティックな展開があったんだ。

それはまア、以下、次号ということだ。

浄國寺ホームページ

<http://joukokuji.yukimizake.net/>